新保 拓実

1 道徳科における他者とともに編む子供とは

道徳科における「他者とともに編む子供」とは、互いの考え方や感じ方を交流し合う中で、自分とは異なる多様な道徳的価値観に触れ、自己の道徳的価値観を見つめ直しながら、よりよい生き方を見出そうとする子供である。

2 道徳科における他者とともに編む子供の具体的な姿と教師の手立て

「互いの考え方や感じ方を交流し合う中で、自分とは異なる多様な道徳的価値観に触れる」とは、多様な価値観の存在を前提に、自他の考えを自己の道徳的価値観と照らし合わせながら比較・検討し、道徳的価値についての理解を深めていく姿である。子供は、これまで自分が考えもしなかった道徳的価値観や、普段は気にも留めなかった友達の意外な思いや考えに触れることで、「今の自分には難しいけれど、〇〇さんのような考え方もあるのだな」と気付く。また、これまで自信がもてなかった自分の考えに対して共感的な意見と出合うことで、「自分の考えにも確かに意味があるのかもしれない」と安心感を得て、自分の考えを見直すようになる。このような対話や協働の積み重ねによって、子供は自己の道徳的価値観を多面的に捉え直し、他者との違いを受け入れながら、人間理解や他者理解を深めていく。そして、「自己の道徳的価値観を見つめ直し、よりよい生き方を見出そうとする」とは、他者の考え方を受け止めながら、自分のこれまでの生き方を客観的に振り返り、新たな道徳的価値観を取り入れつつ、これからの生き方について主体的に考える姿である。こうした経験の積み重ねが、よりよく生きようとする意欲を育み、日常生活における道徳的実践へとつながっていく。

この過程で大切なことは、他者との違いを受け止め、認め合う姿勢であり、他者から学ぶことでよりよく生きようとする意欲を育んでいくことである。教師は、子供がそのような姿勢を育み、自らの道徳性を高めていけるよう、交流や対話を中心とした学習活動の工夫、子供の考えの深層を明らかにする発問、安心して意見を述べ合える学級づくり、振り返りの場の設定など、多様な手立てを講じていく必要がある。

- ※価値観・・・・・・・・個人や社会が何をよい、正しい、大切であるかについての見方や信念のことであり、社会的・文化的背景や経験によって多様に形成されるもの。
- ※道徳的価値・・・・・社会において望ましいとされる行いや考え方の基準であり、人としてよりよく 生きるために大切にすべき基本的な考え方。その内容として、内容項目を指す。
- ※道徳的価値観・・・道徳的価値に対し、一人一人がどのように感じ、どう考えているかという内面的な受け止め方。個人の中にある考え方や感じ方であるため、学びを通して深まったり、変容したりしていくもの。

① 子供の道徳的価値観を深める対話の工夫と授業の手立て

道徳科においては、一人一人の道徳性や実態に即した授業づくりが求められるが、子供の内面に関わる道徳的価値観や思いを的確に把握するには、日常の丁寧な見取りと関わりが不可欠である。そのため教師は、日記や振り返りカード、アンケートなども活用しながら、日常の教育活動を通して子供の思いや行動を継続的に観察し、子供がどのように感じ、考えるようになってきているかを多様な側面から見取る必要がある。そして、その見取りをもとに授業を構想し、子供が安心して自分の思いや考えを語り、他者の意見に耳を傾けられるような学習環境を整えることが重要である。

授業では、子供の発言をただ受け止めるのではなく、「そうなんだ。○○さんの話を聞いてみんなはどう感じた?」と問いかけを全体に広げたり、「どうしてそう考えたの?」「そう考えた背景には何があったの?」と問い返したりすることで、子供の発言に込められた理由や、それを支える道徳的価値観を明らかにし、クラス全体で共有できるようにする。その際、他者への思いや願いが込められた意見については、それを支える道徳的価値観を対比的・関連的に板書し、子供一人一人が自分の立場や考えのよりどころを明確にできるようにする。そうすることで、道徳的価値観の比較や検討が可能となり、互いの考えを深め合う場が生まれていくだろう。さらに、立場を変えて考える場面を意図的に取り入れたり、複数の道徳的価値が関わる教材を選んだりすることで、子供はこれまでの自己の道徳的価値観を見つめ直し、よりよい生き方を主体的に見いだしていくだろう。たとえば、「思いやり」を主題とする授業であっても、子供の中には「友情・信頼」や「公正・公平」といった他の道徳的価値をもとに意見を述べる子供もいる。このような場合では、子供が複数

の道徳的価値観に触れながら本質的な道徳的価値を探っている姿として受け止め、他者とともに編む学びのプロセスを支えることが重要である。

こうした学習の積み重ねにより、子供は他者の多様な感じ方や考え方に触れ、自他の違いを受け 止めながら道徳的価値の理解を深めていく。そして、違いを認め合い、互いの考えから学び取ろう とする姿勢が育まれることで、子供の中に、よりよく生きようとする心情や実践への意欲が高まっ ていくと考える。

② 子供の葛藤に寄り添い自己の道徳的価値観を再構築する学び

これまでの実践や研究から明らかになってきたのは、子供が互いの考え方や感じ方を交流する中で、自分とは異なる多様な道徳的価値観に触れると、生活経験やこれまでの価値観と照らし合わせながら自己の道徳的価値観を見つめ直し、疑問や葛藤を抱きながら他者に関わろうとするようになるという姿である。子供は、こうした関わりの中で「よりよく生きるとはどういうことか」について自分なりに考えを深め、その考えや行動の意味を改めて考えるようになる。

このような学びを支えるために教師は、子供の発言に込められた迷いや思いに共感しながら、表面的な言葉にとどまらず、その背後にある本音や願いを引き出す問い返しを行う必要がある。また、役割演技や動作化などを通して、子供が自分の視点にとらわれず、相手の気持ちや立場を思い浮かべる中で、事象に内在する道徳的価値に対して自分ごととして捉えることができるようにする。そうすることで、子供は「分かっていてもできない」「どちらの考えにも共感できて決めきれない」といった葛藤と向き合えるようになるだろう。この葛藤は、単に正解を求めるものではなく、自らの弱さや迷いに正面から向き合い、それらを受け止め、乗り越えようとする過程で、自己の道徳的価値観を再構築していく機会となる。

たとえば、3年生の教材『ハロー、サンキュー』(B-7 親切、思いやり)では、子供は、道に迷っている外国人を見て「助けたい」と思う一方で、「本当に困っているのか分からない」「自分だったら声をかけられるだろうか」といった葛藤を抱える。こうした「自分にできるかどうか」「思っていても行動に移すのは難しい」といった意見を取り上げることで、子供は人間が持つ迷いや弱さに気付き、さらに他者との対話を通じて、「迷っていた気持ちを乗り越えて、どうして私は声をかけられたのだろう?」と問いをつくる。この問いは、単なる学習課題ではなく、自分の心の奥にある疑問や葛藤から生まれるものであり、他者とともによりよい生き方を探ろうとする学びの出発点となる。教師が、子供のこうした問いや葛藤に寄り添いながら、「その行動の背景にはどんな思いがあったのか」「その迷いはどこから来たのか」と投げかけたり、異なる考えや感じ方に触れられるような場面を意図的に設けたりすることで、子供は自他の考えの違いや共通点に気付き、自己の道徳的価値観を比較・検討しながら再構築していく。そして、「自分の考えを伝えたい」「友達の意見をもっと知りたい」と、自ら関わりを求めて対話や協働的な学びに向かい、他者との関わりの中で新たな気付きや納得を得ていく。こうしたプロセスの中で、子供の考えは揺れたり迷ったりしながらも、逆に確信や自信を深める場面も生まれていくだろう。

このように、他者とともに考えを編んでいく道徳の学びには、自分とは異なる考えに出会い、自己の道徳的価値観を見つめ直す場面がある。そして最終的に、「親切にするときには、自分の気持ちだけでなく、相手の立場になって想像し、自分から進んで行動することが大切である」というような新たな考え方を見いだした子供は、以前の自分との違いに気付き、新たな自分との出合いに喜びや納得を感じるようになる。このような喜びや実感こそが、道徳的価値を日常生活で生かそうとする実践意欲につながるのである。

③ 他者とともに編むことを通して深まる道徳的価値と自己理解の深化

互いの考え方や感じ方を交流しながら、自己の道徳的価値観を見つめ直し、よりよい生き方を見いだしていく子供は、授業の終末において、当初の自分の考えとの違いに気付き、新たな考え方をもった自分自身と出合うだろう。しかし、問い続け、考え続けている最中の子供にとって、その変化に自ら気付くことは簡単ではないが、だからこそ意識的に内面と向き合うことが成長につながる。そこで、自分の内面に目を向ける自己内対話や、自己の道徳的価値観やよりよい生き方を語り合うペア・グループでの振り返りの場を意図的に設けることが重要である。こうした振り返りを通して、子供は自分の考えの変化や深まりを実感し、「一人では気付けなかったことに出合えた」「他者とともに考えを深め合えた」という喜びや納得感を味わうことができるだろう。そして、その実感は道徳的価値についてさらに学び続けようとする意欲を育むとともに、授業で得た新たな考え方を、日常生活の中で実際に生かしていこうとする思いや願いを、より一層深めていくことにつながっていくだろう。